

マルトリートメント(不適切な養育)、その実態と子どもへの影響

講師 友 田 周 子 京都市児童相談所相談支援担当課長
京都市第二児童福祉センター発達相談課長

1. はじめに

私は、心理士として療育等を長く経験し、むしろ虐待への関わりは短いのですが、発達の相談でも「気になるな、虐待が隠れていないかな」と思うようなケースや、典型的な発達障害ではなく母子関係の問題が絡まっているのではないかと感じるケース等もあり、不適切な養育というのは、いつも頭の中で意識していたように思います。長年現場にいて、気になっていたことを、少しでも次世代の皆さんへお伝えできれば、また、一つでも現場での親子の関わりに役に立つヒントとなれば、と思います。

2. マルトリートメントとは

マルトリートメント(以下マルトリ)という言葉聞いたことはありますか。マル=悪い、トリートメント=扱い、という意味で、子どもへの不適切な養育、避けるべき関わりを指します。虐待とまでは言い切れない、もっと広い範囲での不適切な子どもへの関わりであり、園でも学校でも、ご近所の関わり等でも「ちょっと気になるな」ということがあるのではないのでしょうか。最近では、保育士による不適切な保育の報道も目にします。マルトリは虐待と同様に、子どもの発育、発達、心理等に大きな影響を与えるということが、様々な研究から明らかになっています。

虐待の通告受理件数をグラフで見ると、年々うなぎ上りの状況です。少子化社会においてこの上昇ぶりは、虐待を受ける子どもの割合が大変増加しているということです。

マルトリには、身体的マルトリ、心理的マルトリ、性的マルトリ、ネグレクト等があります。

身体的なもの(叩く、罰として長時間の正座等)

は虐待と認識されやすく、悪いことだと分かりやすいですが、心理的なもの、例えば、言葉等により子どもの人格を否定するような行為は、認識されにくいように思います。例えば、教育虐待と言われるように、親が子どもに見合わない高い目標を設定し、それができないことで叱ったり、自由な時間を奪う、といったことも、親が子どもを支配し一人の人格として捉えられていないということで、心理的マルトリとなります。言葉だけのマルトリであっても心理的な影響を与えていると言われています。

最近、警察から児童相談所に通告が多いのは、子どもの前で夫婦喧嘩です。子どもに対して、直接、暴力や暴言等があるわけではありませんが、後々子どもに精神的な影響があるというエビデンスが出ています。また、ネグレクトは、最近では、長時間スマホなどで動画視聴させたり、ゲームをすることを許す、といったことも含まれます。家庭によって事情はあると思いますが、年上の子どもに、小さい子どもを見させるというのも、ヤングケアラーにつながる場合があります、行き過ぎると虐待となることもあるということです。

性的虐待については、私も、児童相談所に勤めるまで「まさか…」と思っていましたが、現実にあります。マルトリから虐待へつながるケースは、少なくないということを頭の中に入れておいてください。

3. マルトリートメントの影響

マルトリの影響は、始まった時期、期間、程度、内容、頻度、受けた子どもの性格・知的能力・性別・特性等によって、一概には言えず、複雑で難しいものです。始まった時期が、子どもが知的に理解している年齢の方が、影響が強いようです。

父親から虐待を受けて一時保護を繰り返していたある子どものケースですが、父親が亡くなったため虐待はなくなりました。その後、不登校になったり、暴れまわったりとトラブルが絶えず、父親が亡くなってからの方が大変でした。今、暴力を受けているわけではないけれど、昔の暴力の影響が後々出てくるということがあるのです。

子どもの性格というのは、大きな要因で、繊細な子どもなら、やはり大きな影響が出てきます。のんびりした性格だからあまり影響がないのかと思ったら、後々大きな影響が出てきたということもあります。精神的な状態が悪くなった時、昔の虐待やマルトリやその影響について考える必要があります。児童相談所であっても、なかなか把握しきれませんが、さかのぼって丁寧に見ていくようにしています。

マルトリの影響①

マルトリの影響には、身体的影響、知的発達への影響、情緒的影響、対人関係の影響、脳へのダメージが挙げられます。

身体的影響：食べさせていないということではないけれど、体が小さい子どもがいます。先日一時保護をした子どもも、3歳児でしたが、一般的な2歳児よりもっと小さかったです。一時保護されてしばらくすると、身長も体重も伸びていました。やはり精神的なストレスによる影響があると思われる。

知的発達の影響：子どもが、叱られるような行動をとった時に、親が丁寧に「何が悪かったか」といったやり取りをするのではなく、カッと怒って叩くということが日常の家庭で育っている場合、じっくり考える思考力や言葉で物事を組み立てて論理的に考えるといった力が、なかなか育ちません。児童相談所で関わる子どもについても、発達指数が80程度の子どもの割合が多く、特に言語領域の遅れが多いように感じています。

情緒的影響・対人関係の影響：影響があるのは当たり前のことで、人とうまくつながれないとか、集団行動の中で飛び出してしまうとか、すぐ手が出て喧嘩になるとか、すぐキレるといったのが、わ

かりやすい姿としてあります。

マルトリの影響②

虐待や不適切な保育を受けている子どもは、親にきつく言われシュンとしているかわいそうな子というイメージがあるかもしれませんが、しかし、現実には、すぐに逃げなくてはいけないような状況に置かれているため、常に脳が過覚醒の状態です。多動で ADHD に似たような症状もあります。攻撃性の高さ、衝動性、キレやすい、という影響や発達の遅れや言葉の遅れも出やすいです。このような症状がマルトリの影響なのかについては、児童精神科のドクターが鑑別診断したとしてもなかなかわからないのが現実です。元々、発達特性等を持っていて育てにくく虐待につながる、といった悪循環もあると思いますが、多動とか落ち着きがないといった行動が本当に子どもの問題なのか、マルトリ等による後天的な問題なのかは、正しい養育環境を整えて何年か経過を見てみないとわかりません。児童精神科の杉山敏郎 Dr の著書にも『第4の発達障害』と定義されており、ADHDかどうかを鑑別することに労力を費やすよりも、虐待やマルトリを受けた子どもは発達障がいのような症状があると考えて対応していこうと提唱されています。だから、多動な子どもの中には、マルトリが隠れているかもしれない、と頭の隅に置いておくの良いと思います。

対人関係の障がいでは、誰にでもべったりとくっつき甘えたり、些細な対応で傷つき、急に拒否的になるような行動をとったりします。これについては、マルトリの影響とはっきり言えるのではないかと、思います。

『虐待順応性反応』については、知っておいてほしいと思います。虐待を受けている子どもが、優しくされると不安を感じて、怒られるような行動をとるというものです。虐待やマルトリを受けた子どもの特徴でもあり、児童相談所でも大変関わりが難しいと感じています。以前、小さい時から父親に叩かれて、児童相談所が関わっていた子どもがいました。思春期になり、父親の心理的な支配等に耐えられなくなり、家を出ました。優し

い里親とマッチングが始まると、不安になってしまい「私は幸せになってはいけない人間だと思う」等と言い出しました。いろいろと働きかけたけれど、結局怖い父親のところに帰ってしまいました。このケースの場合、思春期を待たず、もっと早い時期の働きかけが必要だったと思います。幸せになったり、優しくされることに慣れていない子どもは、そうされると不安になる、という本当に切ない話です。このことは、マルトリを受けた子どもの特徴として、知っておく必要があります。日常的にマルトリを受けているため、その状態が普通で、優しくされると、その変化を不安に感じる心理状態になってしまうのです。このことは一般的に理解しにくい、マルトリを受けた子ども独特の行動パターンだと思います。

マルトリの影響③

心的外傷後ストレス障害（PTSD）には、睡眠障害やトラウマ、フラッシュバック等があります。眠れなかったり食べ物を食べられないといった影響は、震災に遭った後などにも見られる状態です。また、「どうせ私なんて…」と自己評価が低い子どもが多くいますし、偽成熟といって、すごく大人びている子どもがいます。早く大人になって親から離れたいという気持ちや、ヤングケアラ一等しっかりせざるを得ない環境もあるでしょう。年齢以上にしっかりしているが、人に甘えられないといったマルトリの影響が隠れている場合もあります。また、よく見られるのが、食べ物への強い固執です。精神的な満足が得られていないので、食べることや思春期になると性に走る子どももいます。親子の関わりの中で、精神的に満足できていない部分を、物質的なもので補おうとしているのです。買い物依存・過食・拒食等は物質的なもので満足したいという心理から出てくる場合があります。

解離性障害は、虐待やマルトリによるつらさに耐えるため、感情を切り離す状態です。しんどいことがあると、ぼんやりしてつらさを感じないようにしようとするのは、心理的な方策です。それに慣れると、必要な時でもぼんやりして話を聞い

ていないこともあります。そのような姿がよく見られる場合、マルトリの影響かもしれない気になります。また、ぼんやりすることで、余計に叱られるといった悪循環にも陥りやすくなります。しかし、子どもにとっては、ダメージを避け自分を守るための方策だ、ということを理解してほしいと思います。このような状況が高じて、多重人格と言われる状況にもなってしまう場合もあります。「虐待を受けているのは、自分ではなく違う誰かなんだ」と違う人格を作り、その子に虐待を受けさせるという心理状況です。そこまでになると、精神科の治療が必要となります。特に性的な虐待を受けた子どもは、多重人格になりやすいと言われています。

マルトリの脳へのダメージ

脳科学の研究をされている友田明美 Dr は、マルトリを受けた子どもに脳の萎縮が起こっていることを、MRI の画像で検証されました。体罰の多い子どもには、前頭前野（人間の理性、人間ならではの高次機能を司る）の萎縮が見られました。また、暴言によって聴覚野に変形が見られました。全体的に見ると、大脳全体や脳梁の体積が小さく、海馬（記憶）が萎縮しており、強いストレスによって、扁桃体（記憶と情動を司る）が変形していました。行動面や心理面ということだけではなく、脳そのものにかかなりのダメージがある、ということが最近の研究で明らかになっています。

今も研究途中だと思いますが、この脳のダメージが、良い環境に変わることによってどう変化するのか、どんなセラピーや治療をした時、脳の萎縮がどうなるのかといった研究が、これから進んでくると思います。心理士としては、いろいろな治療プログラムによって、脳のどこが変わったのか、または変わらなかったのか、といったことが知りたいところです。現実にはマルトリで脳の萎縮が見られるという事実は、かなり衝撃的なことです。

マルトリを受けた子どもの症状の変化

マルトリを受けた子どもの症状は、成長によっ

てどう変化していくのでしょうか。

幼児期は、まず保護者との関係がうまくいかない「反応性愛着障害」という形で現れます。その子は、保育者とも何となくうまく関われないことが多く、保育者が丁寧に関わろうとしてもそっぽを向いたり、逆にべたべたと必要以上にくっついて離れない等、対人の問題が出てきます。小学校へ上がると、多動性の行動障害を示す子どもが多くなります。じっと座ってられないとか対人でキレるといった症状が出てきます。その後、思春期になると、解離を起こしたり、PDS（不適切な関わりを受けたことを連想するような場面で急にキレたり、暴れたりする）といった行動がよく出てくるようになります。エネルギーの低い子どもは、不登校になったりするし、逆のタイプは、非行に走ったりします。成人になると、難治性乖離・健忘・多重人格・感情や衝動性のコントロールが難しく人との信頼関係が築けない・うつ症状等の症状が見られるようになります。これらの症状は、いつ出てくるかわからないのが実態です。私は『時限爆弾』と呼んでいます。幼い頃のマルトリというのは、ずっと心の中に持っていて、今、症状が出ていなくても安心できるものではないのです。思春期や自身が子育てをする時に、それが出てきがちです。児童相談所のケースの保護者は、親からマルトリや虐待を受けていたという場合が多いため、どこかで、治療をしたり悪循環を断ったりするような手立てがないかといつも思っています。

4. 子どもたちにどう関わっていくか

①子どもの話に耳を傾ける

では実際に、子どもたちにどう関わっていけばよいのかということ、を考えていきましょう。

まずは、子どもの話に耳を傾けるということです。園は集団生活なので、一人の子どもの話をじっくり聞くことは、難しい場面もあると思いますが、マルトリを受けている子どもは、受容的に受け止められたことがないので、子どもの話を否定せずに聞くということが一番大事なことだと思います。難しいことですが、たとえ嘘だと気付い

ても否定せず聞いてほしいのです。マルトリを受けた子どもの中には、多動で怒られやすい子や虐待されるような行動（虐待順応）をしてしまう子どもがよくいます。大人がイラっとするようなことを言ったりやったりしがちで、そのことで、また虐待を受けてもその方が安心する、といった負のスパイラルの心理に陥っています。「試し行動」と言われる大人をイラつかせるような言動をとりますが、そこで否定したり、頭ごなしに注意する等してしまい、寄り添った対応ができないと「親と同じだ」「大人は信用できない」と思われ、悪循環は断ち切れません。子どもの話にどこまで耳を傾けられるかが、大事になってきます。

例えば、「〇〇ちゃんが叩いた」と子どもが言った時、叩いていない場合もあります。それでも、「嘘、叩いてないよ」ではなく「〇〇ちゃんが叩いた、と思ったんだね」と返してあげてください。マルトリを受けている子どもは、気を引くための嘘をついたり、「試し行動」で、大人がびっくりするようなことを言ったりすることもあります。そこで否定するのではなく、子どもがそう思ったという事実を確認する言葉がけをし、そう言いたかった気持ちを受け止めるというのが一つの手法です。明らかに嘘だとわかっていても、いったん受け止め、「あなたはそう思ったんだね」と言う言い方で返します。子どもの言った言葉を、そのままオウム返しのように返すというのも一つの手法です。集団の中で対応することは難しいかもしれませんが、トラブルがあったり、個別で話を聞くような時には、心に留めておいて対応に役立ててください。

以下は、一時保護所での私と子どもとの実際の会話です。K君は父親から殴られているという情報だったが、本人は「何もされていない。大丈夫だ」と言っていました。

〈事例〉K君と支援者との会話

K君：僕、弟のこと叩いたで〜。⇒試し言動？

T：そうなんや、喧嘩したん？

K君：弟なんもしてへんのに叩いたった。

T：それは、弟がかわいそうやったね。泣かはった？

K君：泣いてないけど、血出たで⇒明らかな嘘

T: えっ?それは心配や。病院連れて行かなあかん。

K 君: うっそ〜。先生あほやな、そんなん信じて

⇒相手をイラっとさせる言動

T: 嘘でよかったわ。怪我なかったんやったら安心したわ!

K 君: …

* この後、K 君は、父から殴られていたことを話し出した。

このようにうまくいくことばかりではありませんが、否定されたり話を切られたりせずに話を聞いてもらうことで、受け止められたと感じられるのだと思います。マルトリを受けている子どもは、相手の態度をととても繊細にうかがっていると感じます。このような手法を知り、知識を持って関わるが必要だと思います。

②安定した一貫した態度

園では、大抵、安定した一貫した態度で子どもに接していると思います。マルトリを受けている子どもは、家庭で不安定に関わられています。ずっと怒られているわけでもなく、優しくしてもらえることもあるのです。一緒に出掛けたり、何か買ってもらったりすることもあるけれど、お酒を飲むと豹変する、といったように、親の都合で怒られています。同じことをしても親の状況で、怒ったり、怒られなかったり（無視等）して、その差がすごく激しいので、子どもはとても混乱します。優しくされても、またいつ怒られるかわからないし、同じ行動をしても、怒られたり怒られなかったりすると、どういう行動をとればよいかわからなくなるのです。

園では、どんなことをしたら叱る、どんなことをしたら褒めるということが、かなり一貫しているので、特別なことをしなくてもよいと思います。もちろんないとは思いますが、保育者の機嫌によって、同じことをしても、怒られたり、怒られなかったりするようではいけません。

③肯定的な関わり 現状をほめる(認める)

怒られることが多いので、自己肯定感が低く「自分は生きている価値がない」「自分が悪いから叱られる」という風に考えがちです。思春期に

なると、自殺企図をしてしまう子どもが結構います。今の現状をほめたり認めたりしながら、「あなたは大切な存在なんだよ」と言葉だけでなく態度でも伝えてほしいと思います。保護者自身がほめられたことがなく、子どもをどうほめてよいかわからなかったり、「ほめるところなんかない」と言ったりします。子どもの良いところやどうほめるかを一緒に考えていくことが、支援の一つになります。また、保護者をほめたり認めることも重要なことです。

肯定的な関わりやほめることが大切だということは、子育てにおいてよく言われることですが、マルトリを受けている子どもには特に必要なことです。これらは、思春期に「どう自分が生きていくのか」「生きていていいのか」と考える時の支えになります。

5. ほめる方法

肯定的評価方法には、頑張り帳やポイントカード等があります。発達障がいの子どもの支援としても有効で、視覚的に理解できたり、後で確認できるので、とても良い方法だと思います。

例えば、園で使っている出席ノートです。毎日通園していても休むと叱られがちですが、このようなノートがあると、行くだけでほめる対象となります。園の出席ノートは自己肯定感を高めるツールとなり得る、と私も気づかされました。

「ご褒美」は、ちょっとしたものにするというのがポイントです。マルトリの家庭は、大きなプレゼントをもらって、次はもう何もないというような極端な不安定さがあります。ちょっとしたことをちょっとした「ご褒美」（好きなお菓子やゲームを10分追加する等）でほめるとか、言葉以外の方法で評価するというので「ご褒美」を使っていく方法を保護者にもアドバイスしています。

頑張り帳などを使用する際は、確実にできることに目標を設定します。保護者のやってほしいことを目標にしてしまうと、なかなか達成できず、肯定評価のための頑張り帳にならないため、失敗される保護者が多くいます。できないことをでき

るようにする頑張り帳ではなく、今できていることを可視化するという目標の掲げ方が大事です。

例えば、学校で、座れない子どもなのに、座ることを目標にしてしまうと、全くシールが張れない日が続きます。今、確実にできていることを、シールを貼って評価して、可視化してほめてあげる、という使い方をしてください。「そんなことに意味があるのか」と問われたりしますが、今できていることを評価したら、「次はもっとほめてほしい」と思って頑張る気持ちが出てきます。今できる事を探して評価をしていく、という肯定的評価方法は保護者のプログラムに使うこともあります。(叩かなかったらシールを貼る等)ここでは、今できていることや、ちょっと頑張ればできることを、目標に設定するということが、ポイントです。

考え方を変えるということも重要な視点です。親プログラムでも、短所を長所に変えて考えるというものがあります。例えば、「多動で落ち着きがない」と言うのは、「元気で活発だ」と言い換えられます。保護者はこのような変換がなかなかできず、「こうあるべき」と決めつけてしまいがちですが、「どう変換できるかな」と頭の体操をしながら、一緒に考えています。長所・短所と言われるものも、見方によってはどちらにでも捉えられると思います。ペアレントトレーニングの「良い所探し」と言われる手法です。子どもを変えられるより、保護者の考え方を変えていってもらうことがペアレントトレーニングの中心です。子どもを変えられる場合は、環境を変えたり、先ほど言ったように、できることを評価する等の働きかけによるものになります。

6. 気をつけたい園や学校でのマルトリ

昨今の報道なども踏まえ、園でのマルトリについて考えてみます。マルトリを受けてきた子どもは、マルトリを引き起こしやすく、大人を挑発したり、イラつかせるような言動を取りがちです。しかし、そこで一歩踏みとどまって、受容的な関わりをすると、子どもの回復につながります。逆に、そこで叱ったり、否定的に注意してしまった

りすると、再度マルトリを受けるということになります。度重なるマルトリによって、精神疾患へつながったり、虐待をする親を育ててしまったりすることにもなりかねません。このような世代間連鎖を打ち切りたいものです。園で過ごす時間は、寝る時間を除けば一番長いという家庭も多いと思います。保護者の関わりは最も影響がありますが、長い時間過ごす園で、子どもの回復につながる関わりができれば、大きな支援になります。園での関わりで救われている子どものケースをたくさん知っています。やりにくい子や大人を怒らせるような子が多いけれど、そこでいかに受容的に関わられるかが、一番大事です。これは長い時間過ごす園だからこそできる対応だと思います。

また、経験が少ない子どもが多いので、園でのスタンダードな生活を経験することも大きな価値となります。一時保護をしていたケースで、家で「おもちゃを片づけない」等と怒られ叩かれていましたが、その子は「園ではきちんと片付ける箱があった。家がおかしいと思う」と言っていました。もし、園での生活がなければ、親の言っていることがおかしいとわかりません。園の生活を通して「おかしいのは自分ではない」と理解できたのです。園での普通の生活は、子どもにとって支えとなる大切な場所です。子どもの回復につながるような園での関わりを、お願いしたいと思います。

Q. 質問

マルトリをしている保護者には、どのように関わっていけばよいでしょうか。

A: この質問に、一言で答えることは難しいです。怪我を伴うようなマルトリは、すぐ児童相談所に通告する必要があります。ただ、ほとんどの保護者が、自分も受け止められていない逆境的な育ちをされています。子どもには受容的に関わりますが、保護者にもそうする必要があります。保護者をほめる・認める・話をしっかり聞く・否定しない、ということが基本的なポイントだと思います。止めて介入しないといけない場合もあるので、一概にも言えません。

グループワーク①

- ・具体的にどんな言動がマルトリと考えられるか。
- ・園でしてしまいそうな(言ってしまうような)マルトリ言動は、どんなものか。
- ・そのマルトリ言動を避けるためには、どうすればよいか。
具体的な言い換え方や考え方等を出し合う。

以上の3点についてグループで話し合う。

グループ発表

「早くしなさい」「他の子待ってるよ」等とせかす、何度も注意し「さっき言ったやん」と責める、食事中「もう食べないでいいよ」と言う等がマルトリにあたるのでは、と話し合いました。勿論それまでに何度も働きかけてはいますが、子どもにける言葉としてどうなのか、と話し合いました。

また、家での様子や保護者の関わりによる気になる子どもの姿も多く、園での対応も難しいと話し合いました。

講義よりグループ討議が良いかと思う程、積極的な発言で話が弾み、聞く側の受容的な態度も、あちこちで見られました。

園では一定させなければならないこともあると思います。それに対して急がせたり、集団から外れると「こっちよ」と連れ戻したりすることはありがちなことでしょう。発表の中での「他の子待ってるよ」等と言うのは、マルトリとは違うかなと思います。言葉掛けによって、他の子の行動に注目させ、うまくできたらほめるという関わりだと、マルトリとは言えません。ただ、「他の子はできているのになんでできないの」といった意味合いで言ってしまうと、マルトリになると思います。ニュアンスや言い方、表現に気を付ける必要があります。「食べなくていいよ」はマルトリに入るかな、と思うので「早く食べようね」と言う方が良いかと思いました。

私が、園で見聞きしたマルトリには、「このくらい何でできひんの?」、「いいかげんに〇〇して」、「何回も言わせんといて」、「～ちゃんはできひん。(ダメやな)」、「いつまで待ったらいいの?」という言葉がけや、手首を引っ張って立たせる、子どもの発言を笑う、子どもの発達に見合わない

活動内容、子どもが黙っていても注意し続ける、といったものがありました。行事の前等に多いような気がします。

保育者側の気持ちも大きく、イラっとして言っているとマルトリに近づき、「この子のために」と冷静に言った一言は、そこまで影響しないのかなと思います。

罰的な言い方ではなく、ご褒美的な言い方(肯定的な表現)をしてほしいと思います。「～しなかったら、～できないよ」ではなく「～したら～できるよ」と言い換えてみましょう。「机に乗ったらダメ」ではなく「机から降りてね」と伝え、具体的な行動を示します。できることに目を向け言葉にし、否定語をなるべく使わないようにしましょう。すべてを変えることは難しいと思いますが、「保育の中で否定語が多くなっていないか」「どういう言い換えができるか」と自身で振り返ることが、とても大事なことだと思います。否定的な言い方が多い人は、癖になっていたり、罰の考え方になったりしているので、常に自分で意識するように、頭においておくと思いいます。

「今日は子どもを何回ほめたか」「今日は何回注意したか」といったことも、振り返ってほしいことです。冷静に考えれば、ほめるところがあつたのに注意ばかりしていた、といった反省も出てくるでしょう。ほめることが、注意(叱る)より多くなるようにしてほしいと思います。一日の保育で振り返ってみてください。

また、自分の育ちの傾向を知り意識することは、対人援助職の私たちには、常に必要なことです。時代的なものももちろんありますが、育ちによる、捉え方や考え方の傾向というものがあるので、自分の傾向や育ってきた背景を意識し、振り返り、専門の知識で補うことが重要です。

保育士は重労働だと理解しています。そのため、疲れやストレスをため込んでいると、どんな人でもイラっとすることもあると思います。リラクゼーション(休息)を意識してセルフケアをしてください。

ペアレントトレーニングの際もお話ししましたが、固定観念に捉われていないか、とフィード

バックし、発想の転換や柔軟な対応を心がけてほしいと思います。ある子どもを「言うことを聞かない集団を乱す子だ」と捉えるのか、「集団には合わないが、個性的で面白い子だ」と捉えるのかで、対応も大きく変わってくるでしょう。自分の思考傾向を振り返り、一面だけで子どもを見ないようにしたいものです。

グループワーク②

- ・園でマルトリが気になる子はいるか。
 - ・グループで出し合った「ケース」について、どんなマルトリか、園でどういう関わりをすれば良いか。今こんな関わりをしている等。
- 以上について、グループで話し合う。

今日は、保護者への関わりについて話すのは難しいですが、いろいろなケースがあり、児童相談所が関わるまでに至らないケースでも、現場では「どう関わればいいのか」と悩む保護者も多いと思います。

7. 冰山モデル：見えている行動はほんの一部

子どもも保護者も、見えている行動はほんの一部であり、その底には、今までの経験、マルトリの影響、発達特性、メンタルの問題など様々な問題が隠れている場合が多くあります。見えない水面下を見ようと推測することが、非常に大事なことです。

もしかしたら、子どもの落ち着きのなさには、マルトリが隠れているかもしれません。また、発達障がいの可能性もあるし、一時的な情緒障がいや園の行事のストレスかもしれません。それらが複合している可能性もあります。見えている行動の奥底に、たくさんの要因が影響しているということを考え、理解してほしいと思います。特に、マルトリを受けている子どもは、低年齢であればあるほど、言葉ではなく行動で示すことが多いのです。

8. 最後に

実際は、なかなか一筋縄ではいかないし、問題

が解決することも難しいと思います。しかし、支援者が少しでも知識を持って観察し、寄り添う気持ちで関わることは、いつか子どもや保護者のレジリエンス(回復する力)につながると思います。毎日通い、長い時間を過ごす園での生活は、親子にとって影響力があり、回復のきっかけになるかもしれません。そこに専門家のプログラムもプラスして、共に働きかけることが、子どもや保護者が回復していく過程においての力となることは確実です。今後も、一緒に子どもや保護者のために力を合わせていきたいと願っています。

令和5年度第7回共同機構研修会
令和5年9月29日開催
於：京都市子育て支援総合センター こどもみらい館